

活動報告書

報告者氏名：岩宮由起子 所属：滋賀県立八日市養護学校 記録日：2014/02/24

【対象児（群）の情報】

《学年》

3年女子1名、2年男子2名・女子2名、1年男子1名 計6名（中学部）

《障害名》

どの生徒も知的障害がある。それに加えて自閉症、広汎性発達障害、気分障害等の障害をあわせ有している。

《障害の困難の内容》

- ・言葉でのコミュニケーションをとることができるが、慣れた大人や環境の中だけである。初めての人や場所で自分の気持ちを伝えることが難しく、不安や緊張が高まりやすい。
- そのため、保護者や教師が付き添っての外出はできるが、自分で目的地を設定しての外出をした経験がない。
- ・余暇を自宅で過ごすことが多く、余暇内容もゲームやパソコンをすることが多く、他の余暇を自分自身で見つけることが難しい。

【活動目的】

《当初のねらい》

- ・iPadを活用し、安心して自宅、学校以外での余暇を過ごすことができる。
- ・マップアプリや電車乗り換えアプリを活用して、「自分で行けた。できた。」という経験を重ね、自信をつなげ、外出できるようにする。
- ・友達と楽しい経験を重ねる中で、余暇の幅を広げより充実させる。

《実施期間》

通年を通して実施

- ①平成25年 4月～平成26年1月（内2名は昨年度の6月～継続実施）
- ②平成25年10月～平成26年1月

《実施者》

中学部教諭 岩宮由起子

《実施者と対象生徒の関係》

学級担任

【活動内容と対象児（群）の変化】

《対象児（群）の事前の状況》

- ・ 教師や保護者がいる環境の中でしか、外出をしたことがなく、社会生活の経験が乏しい。
- ・ 家族や慣れた教師、同じクラスの友だちには話しかけることはできるが、その他の人たちに話しかけることは少ない。
- ・ 自宅では決まった過ごし方しかない。

《活動の具体的内容》：

「余暇をひろげるために」（2例紹介）

1：「外出しよう！カロム大会に参加しよう！」



1) 校外にて校外に出る機会を設定し、タブレット端末を活用する練習を行う。

昨年度からの実施事例：

- ①平成24年5月11日学校～郵便局へ行く【徒歩】
- ②平成24年6月17日駅～カロム大会会場へ行く【電車・徒歩】
- ③平成24年11月29日学校～就業体験先へ向かう【自転車】
を行った。



昨年度は、ナビゲーションアプリの中から、生徒自身が《周辺検索ナビ、Navi360、MAP×MAP、Maps+、NaviCon、CityMaps2Go》などをインストールし、アプリの使いやすさ、見やすさを比較した結果、6月からは《Map Fan+》を使用していた。しかし今年度、は検索した中から選択肢も多く出ることや、音声案内、地図の見やすさから、《Google Maps》の活用に変更してみることにした。

2) 《Safari》を活用し、会場と会場近くの駅を検索する。

この時に、キーワードとなる「彦根カロム大会、会場、駅」という言葉を入力して検索することができた。

3) J R 近江八幡駅から J R 彦根駅まで《駅すぱあと》アプリを活用して乗車時間や運賃の検索をする。

タブレット端末を校外でも活用する練習を行っていたため、使用機会が増えたため、事前に情報を調べることも増えた。持ち物、必要な金額、待ち合わせ時間、乗車時間など、教師からの声かけがなくても自分たちで調べることができた。



4) 大会当日（平成 25 年 6 月）《Google Maps》を使用して目的地まで向かう。

集合場所である J R 近江八幡駅～会場近くの J R 彦根駅までの 5 駅約 18 分間乗車し、下車後も継続して《Google Maps》アプリを活用して目的地まで向かう。この時に、他クラスの生徒もいたが、男子 5 名、女子 1 名が参加した。アプリから指定されたルートと周囲の建物の位置を確認することができた。また、右左折する際には、音声ナビゲーションもあるため、大きく道をそれることなく、友だちと相談する中で、教師に一度もルート確認せず、目的地まで向かうことができた。



*カロムとは・・・2人以上で行うボードゲームである。一人もしくは二人ペアになり四角い盤の上に並んだ扁平な円筒形の玉（パック）を特定のエリアからパックと同形の自身の玉（ストライカー）を手の指で弾き、自身のストライカーに記されているのと同色のパックに当て、四隅のコーナーにある穴（ポケット）にパックを全部入れ、最後にジャックを入れるのを競うゲームで、ビリヤードに類似している。滋賀県彦根市を中心に行われている競技である。



②ヨガをしよう!!

1) 保護者から余暇についての相談を受ける。

保護者から、自宅ですべてパソコンやゲームばかりで他の過ごし方ができないだろうか?と相談を受けた。

2) 自宅での過ごし方を聞く。

生徒に何をしてみたいか聞いてみたところ、女子生徒から「先生～ヨガをしてみたい。」と発信があった。私自身ヨガはできないので、iPad先生登場ということで《毎日ヨガ》を活用した。

3) クラス6名でヨガに取り組む。

クラス内では操作するものは一人と決めた。リーダーが行うコースや内容を決定する。

10月より開始した。10月～1月末までの間に計8回実施した。

このアプリの良かった点は、残り時間が出ることで、あと何分頑張ればよいのか明確だったようだ点である。

また、クラスメイトと相談して、脂肪燃焼コース、背中すっきりコースなど、その日の運動内容と比較して、「今日はほどほどにしておく?どうする?」と周囲を気にかけて取りかかる姿が見られた。

2回目から、当番は電子機器を準備する、他の生徒はマットを用意するなど見えやすい場所も譲り合いながらとりかかっていた。繰り返し学級活動の時間に行うことができた。



4) 自宅で取り組む。→

タブレット端末を自宅に持ち帰り、一人で黙々と取り組むことができた生徒もいた。



《対象児(群)の事後の変化》

1:「外出しよう!!」

事後の変化・・・クラスの生徒から自発的に、自転車で遠いところへ行きたいと言ってきた。まだ、具体的に行きたい場所はあがらなかったの、買い物学習に出ることを提案した。

そこで、生徒と相談して、1月にコンビニにデザートを買うに行くことができた。

教室で、自転車で向かえるコンビニを検索し、《Google Maps》を使いルートがわかり、止まって場所を確認し、音声案内も頼りにしながら向かうことができた。



②ヨガをしよう！

自発的に自宅でも実施したい生徒に対しては持ち帰ってもらい、1月末は3名実施していた。2月中旬までは2名となった。このほか積極的にアプリ検索を行うようになり、ウクレレ演奏にも継続して取り組んでいる。

【報告者の気づきとエビデンス】

《主観的気づき》

①昨年度から、学校や家庭以外での使用回数を重ねる中で、周辺の建物の位置や自分自身の位置を把握することや、検索時間も短くなり、操作も素早く行うことができるようになった。

また、数名の友だちと一緒に行動し相談することや、タブレット端末のアプリが道案内してくれることにより、安心して楽しんで向かうことができたのではないかと考える。

保護者や教師に頼る外出ではなく、自分たちで相談した外出したことがきっかけとなり、実際に目的地に到着でき目標を達成できたことで、生徒たちの自信にも繋がったと考える。なかなか外出の機会の少ない、知的障害のある生徒にとって、タブレット端末があったことにより安心して自宅や学校を飛び出すことができた。

(←楽しい様子が伝わる写真ではないでしょうか。)

友だちと一緒にであれば、外出してみたいというきもちが芽生え、事後の変化にあげたように、学校内で外出を提案することができたのではないかと考える。

②教師や保護者に頼らなくても、タブレット端末があることで、時間に関係なく一人で取り組み継続することができたと考える。

また、友だちと一緒に楽しんで活用することで、家でも使いたい気持ちが膨らみ、徐々にではあるが自宅での過ごし方にも、ゲームやパソコン以外の広がりが見られた。



《エビデンス（具体的数値など）》

①集団も異なり使用したアプリも異なるため、一概に比較はできないが、よりスピーディーに現在地から目的地までの距離や時間を検索し、向かうことができるようになった。駅から会場まで、20分間短縮することができた。

| 事例① | 距離(km) | 所要時間(分) | 実際の移動時間(分) | 集団 |
|-------|--------|---------|------------|-------------|
| 平成24年 | 2, 03 | 25 | 40 | 教師1名、生徒(4名) |
| 平成25年 | | | 20 | 教師1名、生徒(6名) |

②自宅と同じ過ごし方(ゲームやパソコン)しかできなかったが、ヨガという新しい余暇が増えた生徒が3名いた。現在も自発的に活用している生徒が2名。また、ヨガ以外にもウクレレの練習などにも取り組んでいることから、余暇に広がりが見えるようになった。

保護者からは、「自宅で親がいなくても取り組める活動で、なおかつ運動できているので今後も楽しんで続けていってほしい。」との意見をいただいた。

《今後の課題》

友だちとの外出を行うことはできたが、一人での外出時に活用ができていない。さらに安心して外出できるようにするための活用方法を考えることが必要となる。

クラスの1名の生徒が自転車と電車を使った自主通学を始めることになった。その際に、スマートフォンか携帯電話の購入か迷われた。保護者としては、保護者自身使うことのできないことや、様々なアプリがあることで知らない間にゲームなどで課金をしてしまうのではないかと不安があると言っていた。

生徒自身はスマートフォンが欲しいという事であったため、本人、保護者、担任とでスマートフォンの危険性と利便性の両方を考え検討した。しかし保護者自身の、不安が大きくスマートフォンに踏み切ることができず、携帯電話を使用する事になった。まだ保護者自身不安な事も多いようであるため、生徒にとって危険性も学習できる良い機会となるように、保護者、生徒と相談しながら活用をしていけると良かった。保護者の方と協力して、学校以外での場での利用も広げることも今後の課題となった。

《その他のエピソード（画像などを含めて）》



○使いたい気持ちが育てる友だちの輪。

帰りの会が終了後に、クラスで誰でも、タブレット端末を自由に使える時間を設定している。そうした中で、クラス以外の生徒も多く集まり、ゲームを介してこれまで話をしたことのなかった生徒が画面をのぞき込み、「これは何?」「これできたよ。」と教師を間に入れることなく、会話を楽しむことが増えた。

○自分の心身の状態を知ることができた。

気分障害のある生徒1名は、月経前症候群などに悩まされている。イライラしたときには、「学校が嫌、家が嫌。」と言うことが多く、消極的な考えへ進むことが多く、鬱病などの二次障害も心配される部分も考えられる生徒である。ホルモンにより、気持ちの起伏が激しくなることがあり、自分自身で気持ちに落ち込みがある時に気づきにくい。

そこで、「ルナルナ Lite」を活用した。このアプリは、月経周期を入力し翌月の月経が始まるまでの間に、どういったホルモンが分泌され、心身の状態を記してくれる。あくまで目安であることを伝えている。

本人も、1日1回アプリをチェックすることで、今日の気持ち(ホルモン)のバランスが一つの目安として捉えられ、「今は、こういうホルモン時期だから、仕方がないよね。」とイライラした際には、そんな自分を受け入れる様子が見られた。

○保護者に気軽に活用してもらおう。協力してもらおう。

①アプリを使って学級通信を作成し、毎月1回送信する。

②学校の様子を写真に取ることや、集会の出し物の様子を動画に撮った。それを自宅に持ち帰り家族で学校の様子を知ってもらい良い機会となった。気軽に使用できたことで、保護者の方から、写真や動画を撮って欲しいとの声があった。気軽に活用できる中で、便利さを感じてくれた保護者もいた。